



流された文化復興

心の復興の応援を



「一万人の協力で、

500万円の応援募金を」

荒川区の友好交流都市である岩手県釜石市への釜石市民元氣応援プロジェクト（主催 荒川区社会福祉協議会）が1月20日にスタートし、予定を大きく上回り、3万2552人の協力で募金176万9167円（6月6日現在）を得ました。

3月には早速、釜石市の伝統文化である箱崎虎舞の虎頭・太鼓やトライアスロン大会開催用備品や長唄・三味線・お茶・将棋など伝統文化子ども教室、それにスポーツ少年団、小中学校の運動会用具等に募金を分配致しました。

昨年3月11日、釜石市を襲った巨大津波は、小学校の3階までの高さであり、堤防は津波に呑まれて現在はありません。携帯電話が繋がるようになったのは1週間後、電気は3週間かかりました。水、食料、毛布が不足した状況の中、翌日には荒川区から給水車1台が支援に駆けつけました。

釜石市の人口の4分の1の約1万人が88ヶ所に避難し、死者889人行方不明者157

人、小中学校の生徒のうち54人が親を亡くし、14人の子どもは孤児となりました。

「釜石の奇跡」

小中学生約3千人のほとんど全員が津波から逃れて無事でした。全壊した3つの小中学校では、日頃からの防災教育が生きました。「想定を信じるな」「最善を尽くせ」「率先避難者たれ」の「避難の3原則」が奇跡を起こしました。

「あっちゃ、逃げる」

ただならぬ激しい揺れが収まると、大声を上げながら最初に走り出したのは、部活動などでグラウンドに出ている生徒たちだったそうです。隣接する鶴住居小とは合同避難訓練を何度も行っていたため、高台に逃げる釜石東中の中学生を見て、小学生も声を掛け合いながら高台を目指し、子どもたちが走り去って間もなく、釜石東中、鶴住居小の校舎は津波の直撃を受けました。

「自分の命は自分で守る」

「助けられるのではなく助けよう」釜石小学校の子ども達は津波が来た時は既に下校しておりました。子ども達が、それぞれ避難しながら隣所に声をかけていたおかげで助かった方も多くいます。先生達は、ばらばらに避難した子ども達を顔を見て無事を確認にまわりました。

全壊した唐丹小学校は、今年の1月から仮設で授業が再開しました。学校のグラウンドや公園は、仮設住宅が建てられたり、

ガレキが置かれたりしています。そんな状況の中で、全て消失した運動会の備品が荒川区の寄付金で揃い、この春には運動会が開催されました。

「人口の過疎より心の過疎が怖い」

ガレキの処理率は3%、82万トンあります。また、浸水した土地は、産業はと課題は多くあります。震災により人口は流出しています。

「夜明け前が一番暗い」

釜石市長は、これから全力を挙げて遠くない将来に必ずや夜が明け復興したことをお伝えできるものと考えています。

復旧から復興への時間はかかりますが、釜石市民応援プロジェクトにより、種をまいてもらい、大きく育てようと思うと釜石市社会福祉協議会会長は話されていました。1年3ヶ月過ぎて記憶はぼやけて来ますが、震災の爪跡は、まだまだ残っています。

被災地を思うことだけでも支援です。現実を知り、そっと寄り添い続けませんか。

